

## 子どもに“一步離れて”寄り添うこと

教育研究所 所長 佐伯 胖

研究所での研修の中心の一つは、「振り返り」である。多くの研修員の「振り返り」は、子どもの思いや気持ちに「寄り添う」ことに向けられている。さまざまな場面での子どもの気持ちをしっかり受け止めていたか、気持ちを感じ取っていたかを振り返り、もっと子どもに寄り添ったかわりができなかつたらどうかと思い巡らせる。

このような「振り返り」は、研究所に来る前の自分が、子どもを「教える」対象としてばかり見てきて、「わかってくれない」、「学んでくれない」ことに苛立ち、「どう教えたらいいのか」ばかりを考えてきたことから脱して、「子どもの側から見る」ことの重要性に気付くことから生まれてくる。すなわち、これまでの「教師中心主義」から脱して、「子ども中心主義」の見方に転換するのである。

しかし、「子ども中心主義」に立つことは大いに結構だが、そこから「教育」を考えたとき、「教育的」な働きかけはいらぬのだろうか。子どもが生き生きとしてくることは歓迎だが、教師の側に何らかの「教える」という意図的な働きかけがあるはずで、子どもに「寄り添って」ばかりではないだろう。

そこで出てくる一つの考え方は、子どもの育ちを「援助する」ということであろう。教師は子どもが育っていくべき「望ましい姿」を思い描いて、その「望ましい姿」に向かって、子ども自身が自主的に、また教師や他の子ども達と協働的に、「育っていく」ことを援助するという、「教育即援助」の思想であろう。この考え方は、一見、「教え主義」とは違う、子ども中心主義に立つ教育観のようであるが、教師の「つもり」としては「教えていないつもり」でも、実際には、「のぞましい子どもの姿」が持つべき特性を「資質・能力」のリストとしてかかげて、それらをあたかも子ども自身が自主的に到達するかのようにして達成させるという、「見えざる教え主義」になってしまわないだろうか。そこでは、教師の側の「教えたい」という意図をいかにうまく隠して、子どもを見事に「のせる」というのが「教師のうで（技術）」とされる。しかし、それでは何か子どもをうまく「だまして」いるだけのことになりはしないだろうか。

そこで私が提案したいことは、子どもに「一步離れて寄り添う」ことである。子どもにピッタリ寄り添うのではなく、「一步離れる」のである。「一步離れる」のは、当該の子どもの時間・空間的な「周辺」を見るためである。その子どもがどのように生きてきたか、これからどのように生きる可能性があるかという時間的周辺が見えてくる。さらに社会的周辺も見えてくる。子どもが育ってきた環境・社会、これから育って生きるべき環境・社会という空間的周辺を、子どもと一緒に「見渡し」て、子ども自身の「よくなりたい」という願い—子ども自身、当初は気付いていないかもしれないが、当人の悪戦苦闘や周辺のかかわりで後になって「ほんとうはこうなりたかったんだ」とわかる「後付けの願い」もある—に即して、次の一步を踏み出すことを励ます、それが本来の「子どもに寄り添う教育」なのではないだろうか。

(2018. 3. 31)